**木造四天王立像**

四天王は大乗仏教の伝統の神であり、アジアの至る所で見られる。重装鎧に身を包み、頑丈な棒と槍を持ち、仏陀の敵から北、南、東、西を守っている。多くの場合、中央の本尊がお座りになっている須弥壇の周りに配置されている。須弥壇は物理的および形而上学的な宇宙の中心に位置する仏教宇宙論の神聖なる5山である須弥山を表している。これらの四天王像は、もともとは大講堂中央の須弥壇の釈迦牟尼仏を囲むように配置されていたが、1933年以降、摩尼殿の幕屋に納められている。幕屋の扉は、毎年一度だけ1月18日の平和と五穀豊穣を願う修正会の日に開かれる。

それぞれの彫像は、10世紀後半に圓教寺の開祖性空上人（910–1007）の弟子であった感阿上人によって一本の檜から彫刻された。四天王像はそれぞれ個性的であるが、金色の光背を背に、足元には渦巻く雲のような形をした土台など、いくつか共通する一般的な特徴がある。四天王はまた、仏教の教えに無知で悪魔のような姿の天邪鬼を踏みつけている姿で表現されている。